Jazz Interview Vol.36

次世代のジャズ・シーンを担う逸材～注目のジャズ・ピアニスト！

海野雅威【Tadataka Unno】

2013 年 5 月に吉田豊 (b)、加納樹麻 (ds) と共に自身のトリオでジャパン・ツアーを行ったニューヨーク在住のジャズ・ピアニスト、海野雅威。
その自然体のジャズ・ピアノは、抜群のスイング感と美しさ、遊び心とニューヨークの風、そして、ジャズへの深い愛情も感じさせてくれる。
2011 年 11 月にニューヨークの街並みが思い浮かぶような素晴らしいソロを披露してくれた『プレイズ・ジャズ・スタンダード～ソロ・ピアノ～』、2010 年 10 月にはジミー・コブ (ds) とハッサン・シャコー (b)、ゲストにフランク・ウェス (ts,fl) を迎えた渾身作『アズ・タイム・ゴーズ・バイ』をリリースし、両アルバム共に話題となった。次回作も待ち遠しい限りだ。
ニューヨークに渡って 6 年目。あの偉大なるジャズ・ピアニスト、ハンク・ジョーンズが晩年最も期待を寄せていたピアニストで、日本ジャズ界が誇る逸材である海野雅威が語ってくれた貴重なインタビューです。
【＊このインタビューは 2013 年 6 月に本誌『The Walker's』Facebook Page にて掲載したインタビュー記事より再編集・加筆したものです。】

Photo by John Rogers

♪ まずは海野さんがピアノを始められた経緯とジャズとの出会いについて聞かせて下さい。

僕の両親は音楽好きで、ジャズに限らずいろいろと聴いていました。その影響で赤ん坊の頃からジャズの他にクラシックやロックなども自然と聴いていたんです。母の勧めもあって 4 歳からピアノを習い始めたんですけど、練習嫌いでしたね。でも自分の好きなように弾く事は好きで、ジャズっぽい曲を作ったり、オスカー・ピーターソンの「酒とバラの日々」を耳コピして合わせて弾いたりしていました。それで、親もジャズの方が向いているんじゃないかって思ったようで、9 歳の時に父がジャズの教室に連れて行ってくれたんです。今思えば、自然とジャズと出会ったという感じが良かったと思います。

♪ その後はずっとジャズ・ピアニストとしての道を邁進されているのですね。

最初のジャズの先生は大塚雄一さんで、その後、元岡一英さんに師事しました。今までとはまったく違う大人の世界に足を踏み入れたようなワクワクする感覚でした。お二人とも僕を子供扱いせずにきちんと向き合って下さった素晴らしい先生でした。宿題はろくにしていきませんでしたが（笑）。ただ先生に会ってピアノを一緒に弾く時間と非日常的な世界が楽しかったんですね。そのおかげで、同時にクラシックも続けていくことができました。

印象深いエピソードがあるんですよ。父がアート・ブレイキー (ds) を聴きにブルーノートに連れて行ってくれた時の事です。その夜僕はライヴを聴きに来ていた中でただ一人子供だったので、アート・ブレイキーが演奏前にわざわざ近づいてきて「ナイス・ボーイ！」と言って頭を撫でてくれたんです。その時のことは今でも鮮明に覚えています。

最近クリフトン・アンダーソン (tb) のバンドで一緒に演奏しているベーシスト、エシェット・エシェットと話していたら、なんとあの時ベースを弾いていたのは実は彼だったんです。アート・ブレイキーは大の子供好きだったという話も聞きました。20 数年前に聴いたエシェットと今はこうして一緒に演奏しているんだなあと不思議な縁を感じて感慨深く思いました。アート・ブレイキーが縁を繋いでくれたんでしょうね。

♪ ニューヨークに渡ったきっかけについて聞かせて下さい。

僕にとっては親父のような存在である鈴木良雄 (b) さん（通称チンさん）との出会いが大きいです。ニューヨーク出身のドラマー故セシル・モンローと共に鈴木良雄トリオで 4 年演奏しました。その他にもトミー・キャンベル (ds)、マーク・テイラー (ds)、レイモンド・マクモーリン (ts) との共演の機会も度々ありましたので、少しずつニューヨークの息吹のようなものを感じていました。

鈴木良雄トリオで大阪でライヴを行った時のこと、始まってしばらくしてピアノに一番近い席に座った一人のお客さんがいました。なんと、来日コンサート後にケニー・バロン (p) さんが一人でいらしていたのでした。その後、ダド・モローニ (p) さんも。お二人が大変褒めて下さってニューヨークに行くべきだと薦めてくれました。特にダドはかつてご自身がイタリアからニューヨークに渡っているので具体的にアドバイスをくれました。

それで 2006 年に妻と一緒に初めてニューヨークを訪れたんです。英語も全く喋れない状態で行ったんですけど、街の雰囲気に圧倒されちゃって、その時はこれはちょっと住めないかな…、居心地悪そうだな…と思ったんですよ。その旅行の直後、チンさんに『JVC ジャズ・フェスティヴァル』への出演オファーがあり、今度は初めてニューヨークで演奏の機会がありました。その際、増尾好秋さんのレコーディング・スタジオで鈴木良雄トリオのアルバム『For You』をレコーディングしたんです。2007 年にはプロデューサーの伊藤八十八さんが僕のアルバムを作りたいと言って下さって、再びニューヨークを訪れました。ジミー・コブ (ds) とジョージ・ムラーツ (b) というメンバーでした。それがもう過酷だったんですけどね…（笑）。その日初めて会う憧れの巨匠とリハーサルもない一日録りで、レコーディング前日は一睡もできずひどい時差ボケでした。それが『MY ROMANCE』というアルバムです。学ぶ事が多いレコーディングでした。

ニューヨークを訪れる機会が重なり、だんだん街が身近に感じられるようになってきました。音楽だけではなく、違う文化に触れて生活するということ、ジャズという音楽が生まれた背景に一番興味がありましたね。

♪ 奥さんはニューヨークで生活することに反対はしなかったのですか？

僕の方が最後まで悩んでいたぐらいで、反対というよりもとりあえずチャレンジしてみよう、という感じで最終的に彼女が背中を押してくれました。

♪ 現在のニューヨークでの生活はいかがですか？

ライヴやセッション、音楽をゆっくり聴く時間があったり、非常に恵まれています。ジミー・コブ (ds) のご自宅にセッションに行ったり、昨年 10 月に 91 歳で天国に旅立ったフランク・ウェス (ts,fl) もよくセッションをして可愛がってくれました。ジミーやフランクは「来てくれてありがとう、楽しかったよ、またいつでも来てね」って。いつもそんな彼らの優しさにジーンと来てしまいます。ハンク・ジョーンズ (p) もそうでしたし、ジュニア・マンス (p) やジョージ・ケイブルス (p) もそうですが、素晴らしい人ほど全然おごらないんですよね。ニューヨークで心から尊敬できる人と出会える事、それが何よりも貴重な財産です。あとは、健康でいる事も大事ですよね。

♪ ニューヨークでの音楽活動について聞かせて下さい。

忙しい時はほぼ毎日どこかで演奏しています。スローな時もありますけどね。渡米時には、ほとんど知り合いがいないところからのスタートでした。ジャズ・クラブでのセッションなどに顔を出し、ライヴを聴きに行きミュージシャンの友達が次第に増え、そのうちセッションしようってことになって誰かの家に行く、それが仕事に結びついたり。ただ名刺を持っていって名前を覚えてもらうというような自己主張は全くしませんでした。英語が喋れなかったのもありますかね（笑）。互いの言葉が理解できても心が通じ合わない場合もあるわけで、その反対に言葉が通じなくても音を出すと心のどこかで繋がれるという事を学びました。まさに音楽で会話しているような感覚です。

リーダーで演奏する他は、ジミー・コブ（ds）やウィナード・ハーパー（ds）、クリフトン・アンダーソン（tb）のバンドなどで演奏しています。

2013 年 8 月にジミー・コブのトリオでヴィレッジ・ヴァンガードで一週間演奏しました。あの場所でライヴ録音された数々の名盤を昔から聴いてきましたからね。自分がまさかそこで演奏することになるとは夢にも思っていませんでした。ジミーが僕に信頼を置いてくれているのが、ひたむきに演奏する姿からひしひしと伝わってきて本当に嬉しかったです。また、先輩や友達のミュージシャンがたくさん聴きに来てくれた事、オーナーのロレイン・ゴードンさんから賛辞を頂いた事も嬉しく、その一週間は責任も大きかったですが、特別な経験でした。

ニューヨークに来て以来ジャズを築いてきた世代の人たちや同世代の仲間と交流して、コミュニティの一員だと認めてもらえてきて、今までは特別であったことが日常の一部になってきている感覚があります。幸せな事だと思います。昨日今日でできるようになったわけではなく、今まで育ててくれたいろいろな方のおかげです。小さい頃からやってきていることが今に繋がっている、と深く実感できるようになってきて、両親には改めて感謝したいです。

♪ 現在のニューヨークのジャズ・シーンはどう思われますか？

最近は地域のコミュニティと、ミュージシャン同士のコミュニティということを意識するようになりました。ジャズ全盛期は地元の人に愛された地域に密着したジャズ・

クラブがあり、ジャズがもっと身近で生活に潤いを与えていたと聞きますが、現在は鑑賞する音楽として少し遠いところに行ってしまったようです。地域に根ざした文化としてのジャズを今一度広げようと、特に僕のリーダーのウィナード・ハーパーは奮闘しています。ミュージシャンも特別な存在ではなく、そのコミュニティの一員なので、誰かの演奏を聴きに行く事も多いですね。ミュージシャンはひとつの家族のような連帯意識があるように感じるようになりました。

♪ ニューヨークで活動されてからご自身のピアノに対しての意識も変わりましたか？

どういう曲を弾いても僕なりの何かを自然と表現出来るようになっていたらいいなという思いは強くなっています。個性を（無理に）出すというのは好きではないですね。影響を受けようと他人を意識したり、何か取り出さなければとか逆に人と違うことをしなければいけないというのは、僕にはあまり自然なことには思えなくて。心から演奏したいと感じた音楽がたまたま結果として他の誰とも違うというのが先人達のジャズで、だから自然と心に入ってきて美しく感じるのだと思います。

僕はどういうピアニストになっていくんだろうって僕自身が楽しみにしているのかもしれません。

♪ 今後もニューヨークでの生活を続けられる予定ですか？

はい。現在ニューヨークに住んで 6 年目でやっと少し落ち着いてきましたけれど、あっという間だった感じです。2010 年に、ベティ・カーター・ジャズ・アヘッドというケネディー・センターのプログラムに選抜してもらい、ネイザン・デイヴィス (Sax)、カーティス・フラー (tb)、ジョージ・ケイブルス (p)、ルーファス・リード (b)、故ビリー・テイラー (p)、に直接お会いする機会を頂いて、僕の演奏を気に入って頂いたんです。彼ら大先輩の助けもあってグリーンカード（＝米国永住権）が取得できました。心を引き締めてこれからもアメリカで演奏を続けて行く予定です。

♪ 海野さんがニューヨークで注目している若手のベーシストは誰ですか？

やっぱり恭士くん（＝「The Walker's Vol.21」の Jazz Interview にも登場した現在ニューヨークで活躍している中村恭士）ですね。本当に素晴らしいベーシストです。すでに多くのミュージシャンから信頼されて世界中を飛び回っています。彼は本当にソウルフルでブルージーで、それもハートの部分というか。日本人としても同世代としても誇らしく思います。

♪ ニューヨーク以外でジャズが盛んな都市はどこですか？

ワシントン D.C. は凄かったですね。ニューヨークには D.C. 出身のジャズ・ミュージシャンも結構いて、特にベーシストが多いです。ベン・ウィリアムス、アミーン・サリーム、エリック・ウィーラー、コルコラン・ホルトなど、活躍中の若手ベーシストばかり。どうしてなのかなと思っていたのですが、先日ウィナード・ハーパーとケネディー・センターで演奏した際に、彼らの出身校でもあるデューク・エリントン・スクール・オブ・ジ・アーツでも演奏し生徒さんと交流する機会があったんです。その学校の素晴らしい教育システム、情熱を持った先生がいらっしゃる事を知りその理由がわかりました。そもそも D.C. はジャズの父デューク・エリントンの生まれ故郷ですからね。アメリカで生まれたジャズ文化を守り、さらに現在に受け継いでいる地でもあるという認識を新たにしました。

昨年 10 月 20 日に惜しくも 84 歳で他界された偉大な敬愛するディック・モーガンも D.C. の誇る偉大なピアニストでした。12 月に予定されていた彼のライヴを聴きに行く計画をしていた矢先に訃報に触れショックでした。個人的に交流があったわけではないのですが、大ファンだった事もありメモリアルサービスに参加しました。その時に会ったディックの元バンド・メンバー達が本当に温かい方達で。初めて会ったベースのデイヴィッド・ジャーニガンが今年 1 月に行われたディックの追悼コンサートのピアニストとして僕を大抜擢してくれました。（彼が僕の演奏を聴いたのは、メモリアル後に行ったほんの数曲のセッション一回きりだったので、僕の方が依頼を聞いて驚いたくらいです）ディックのバンド・メンバーと演奏するのはその時が初めてで、リハーサルもなく本番。コアなオーディエンスがつめかけ満員の教会での演奏でした。きっとディックが天国から聴いていてくれたんでしょうね。心から楽しんで演奏ができました。ディックの奥様は涙を流して大変喜んで下さいました。演奏後、次々にお客さんが僕のところに来て「よかったよ」と口々に興奮しながら伝えてくれるので非常に嬉しかったです。D.C. のお客さんの音楽へのリスペクト、愛情はあたたかいなと肌で感じた夜でもありました。

♪ 師匠であるハンク・ジョーンズとの出会いについて聞かせて下さい。

僕のアルバムをプロデュースして下さった伊藤八十八さんがグレイト・ジャズ・トリオを作ったきっかけの方で、幾度となくハンクの日本ツアーを企画し、アルバムを作ってきました。その伊藤さんが僕とハンクとの縁を繋いでくれたんです。ティファニーの 2 作目のアルバム『マイ・フェイヴァリット・シングス』のレコーディングの時にハンクがピアノで、僕がフェンダーのエレクトリック・ピアノを弾かせてもらうという凄く貴重な経験をさせて頂きました。

♪ 2010 年 5 月 16 日、ハンク・ジョーンズが 91 年の人生の幕を閉じる時、海野さんはその最期に立ち会ったと聞いていますが、その時の様子を聞かせて頂けますか？

僕と妻、ハンクのマネージャーとハンクのお友達の 4 人だけだったんです。僕は病室で小さな音でキーボードを弾き続けました。ハンクは静かに聴いていてくれました。最後まで家に帰って練習したいと言っていました。「またよくなってすぐピアノ弾けるようになりますよ、絶対！」と励ましましたが、その時にはまさか本当に亡くなってしまうとは思っていなくて…。ハンクの大きくてたくましい、でもとてもふわっとしていて包み込むような柔らかい手は忘れられません。

♪ 海野さんにとってハンク・ジョーンズはどのような存在でしたか？

ミュージシャン、音楽、もうピアノの神様ですね。本当に冗談じゃない天国から来てくれた音楽の使者ではないかと思っているくらい素晴らしい人でした。別格ですね。気品とセンスがあります。ハンクのピアノは素直に心を開いていてくれているような親しみを感じるんです。自然に奇をてらわないで、でもしっかりと深く存在している。究極の理想にも思えます。そして、ハンクは柔軟に音楽を楽しめる人だったと思うんですよね。演奏するメンバーが誰とであってもハンクが共演できたのは、予め準備してある自分だけの主張を述べるのではなく、相手を尊重してよく聴く中から生まれる、その時の自分の感情を瞬時にピアノに託せるという凄いものがあったからだと思うんです。唯一無二の存在です。

2013 年 8 月ヴィレッジ・ヴァンガードでのライヴ
ジミー・コブ (ds) トリオ with パウロ・ベネデッティーニ (b)

♪ 将来はハンクさんのようなジャズ・ピアニストになることを目指しているのですか？

もちろん見習うべきところは沢山ありますが、たとえ僕がいくら大好きで尊敬していてもハンクのように弾く事を目的として演奏する事は、彼の教えに最も反すると思うんです。ジャズは単なる形として音を表現しているのではありません。自分の感情に直結する音以上のメッセージがあり、自分がその瞬間にどう感じるかをダイレクトに表現できる素晴らしい音楽だと思います。常に自分の中から発する言葉である必要があります。僕がハンクのようなピアニストになりたいと言う時の真意は、演奏スタイルやフレーズなどの形の事ではなくて、彼の人柄、生き方から感じた貴重な経験を自分自身の音楽に自然と生かしていきたいという事と、その時の感情を音に表現できるピアニストになりたいということです。

♪ 新作の予定はありますか？

いくつか案を練っているところです。オリジナル曲も出来上がっているものもありますし、近々形にしたいと思っています。ピアノトリオで作りたいと思っています。

♪ 共演するメンバーの方にも恵まれているのですね。

はい。本当にそうですね。心が通じて互いに尊敬し合えるミュージシャンと演奏したいですね。

♪ 将来これをやってみたいというような大きな夢はありますか？

昨年 2013 年は多くの尊敬するジャズ・ミュージシャンが他界しました。でも彼らの精神は、無くなるどころか、僕の中ではとても大きな支えになっています。彼らが世代から世代へとその精神を受け継ぎ伝えてきてくれたおかげで、僕らの世代もジャズに魅了され演奏しています。ここで絶やすわけにはいきません。偉大な先輩に与えてもらった大きな愛を自分だけで留めておくのではなく、後の世代に伝えて行く責任もあり、僕はその世代の中の一人だという自覚を持ち始めました。それから、現在自分が当たり前のように思える日常、環境、仲間との演奏を年を重ねても続けていける事、それは決して当たり前の事ではないので、続けていけることそれ自体が大きな目標であり夢でもあります。

♪ 最後に「The Walker's」にメッセージをお願いします！

「The Walker's」がまだフリーペーパーだった時代、僕はまだ日本にいたんですけど、ライヴハウスで見かけるようになって「何だ、この素晴らしい雑誌は！」と思って、密かにファンだったんです（笑）。この雑誌にはジャズへの愛情がぎっちり詰まっていて、ジャズの愛で出来ていますね。ジャズ・ファンはもちろん、ミュージシャンが読んでも凄くためになることが書いてあって、有益な情報が詰まっていますよね。僕はニューヨークでもこの「The Walker's」を読みたいです！

海野雅威 official website : http://www.tadatakaunno.com/

アズ・タイム・ゴーズ・バイ
Happinet：HMCJ-1002
2010 年 10 月 27 日発売

プレイズ・ジャズ・スタンダード～ソロ・ピアノ～
Happinet：HMCJ-1009
2011 年 11 月 23 日発売